



アジア家族療法アカデミー 第4回年次大会

■2017.11.1~4

■茨城/つくば国際会議場

(田村毅研究室) 田村 毅

2017年11月1~4日に、つくば国際会議場においてアジア家族療法アカデミー (Asian Academy of Family Therapy) 第4回年次大会が、日本家族療法学会の共催のもとで開催された。アジア諸国から8カ国の地域 (中国, 香港, マレーシア, 韓国, シンガポール, 台湾, バングラデシュ, 日本) と、アジア外から9カ国の参加者を加え約150名が集まり、3日間にかけて50あまりの演題が発表された。

大会のテーマは「家族療法: 東と西」であった。家族療法の理論と技法はこの40年間、欧米文化において発展し、アジア地域の臨床家はそれを学び取り、自身の文化に適合させてきた。システム理論では個人の枠組みを超えた上位システム、つまり家族、地域、社会そして文化などを視野に含める。欧米とは異なる伝統を持つアジア文化が家族システムのあり方や家族支援の方法論にどう関連するのかを明らかにし、アジアの家族療法家のアイデンティティを模索する大会となった。

基調講演は香港の Wai Yung Lee による「多世代家族の関わり」、アメリカの Monica McGoldrick による「居場所と人生の語りとしてのジェノグラム」、ニューヨーク大学の 渋沢田鶴子 による「家族療法の文化的視点」、ハーバード大学の David McGill による「ひきこもりと日本の家族の変遷」などがあつた。

十数年前に、ニューヨークで長くサルバドル・ミニニューチンと活動してきた Wai Yung Lee が帰国してから、アジア内の家族療法家の交流が活発になった。2013年に、それまで香港内のみで活動していたアジア家族療法アカデミーがその枠組みをアジア地域に広げ、年次大会が開催されるようになった。今回は第1回 (香港)、第2回 (香港)、第3回 (上海) に続いて、日本での開催であった。

アジアの家族療法家たちの発表には、世代間 (transgenerational)、ヒエラルキー、ジェンダー、子どもの立ち位置、三角関係化 (triangulation)、分化 (differentiation)、絡み合い (enmeshment)、境界 (boundary) などのキーワードが度々登場する。これらがアジアの家族を理解する重要な概念になることが、本大会での交流で確認された。

参加者が欧米中心の国際学会に比較すると、アジア中心の国際学会は類似点が多くとても親しみを感じる。たとえば親子関係を基軸とした拡大家族の関係性や嫁姑葛藤などはアジア諸国に共通してみられ、日本と驚くほど似ている。その一方で、夫婦の関係性、コミュニケーションスタイル、そしてセラピストの関わり方などは中国文化圏や韓国と大きな相違を感じる。近くて遠い近隣諸国との学术交流を深めると、今まで欧米から得られなかった新たな視点が見出されるだろう。

次の第5回大会は、2018年10月26~28日に台湾の台北にて開催される。6月末まで演題が募集されている。詳しくは、<https://www.acafamilytherapy.org/> を参照されたい。

第35回日本森田療法学会

■2017.11.10~12

■熊本/熊本大学黒髪キャンパス

(京都森田療法研究所) 岡本重慶

平成29年11月10日より12日まで、第35回日本森田療法学会が熊本大学黒髪キャンパスで開催された。学会のテーマは「森田療法と五高」であった。熊本の旧制五高は、もちろん森田正馬の母校である。震災から二度目の秋、伝統ある熊大キャンパスの銀杏は黄色を濃くし、学会の中身も濃い3日間であった。大会長の保健センターの藤瀬昇教授と神経精神科医局の皆様が準備を整えてくださったおかげである。

事務局長を務められた遊亀誠二先生から、スタッフの方々の苦労話を伺った。「平成29年の学会開催

は、その2年前から予定されていたが、28年4月に熊本地震が起り、余震も続く中、開催が危ぶまれた。しかし大会長はじめ皆の熱意と協力で、予定通りの開催へと漕ぎ着けた。一つの目玉であった五高記念館の観覧は、被災により館内は立ち入り禁止で、外観を観覧できるとどまった。せめてもと藤瀬教授は、森田正馬が生活した五高の学生寮と下宿先の場所を特定され、会長講演で所在地の写真を出して紹介された。学会懇親会も大盛況だったが、終了後暗闇のキャンパスの中、医局の若い男性医師らが工事現場の誘導灯を持って、最後まで道案内に頑張った」。

学術発表に対する印象については、卑見に流れないよう、あえて複数の方々のご意見をヒアリングした。それらより有用なコメントを取り上げ、私感も加えて次に記述する（文責は筆者）。

熊本大学医局の心理士や医師の、若手数人の先生方から、貴重な感想をいただいた。まずそれらを抜粋して紹介する。「会長講演での五高時代の森田の下宿探しは、まるで歴史を紐解くドキュメンタリー番組を見るようで胸が弾み、森田療法への親近感が増した」「場所が同定された下宿先周辺には私も行って見たが、学会参加者がかなり見学に来訪されたようだった」「池田学教授の認知症についての特別講演では、森田のエッセンスを取り入れた話に魅了された」「一般演題の『踊る森田療法』『歌う森田療法』は、人間の自然な営みに自己治癒力を見出すところに、芸術療法との共通点があり、また書道の『渾身の一筆』についての発表では、今ここになりきる体感的境地に新しい自己の解放があると思った」。

台湾から学会に参加された生活の発見会員、徐玉章氏と会場で会ってご縁を得た。徐氏と筆者は、一般演題で、当事者兼発見会員兼協力医で、地域で公民館活動もなさっている医師の発表に関心を持った。「高齢者に対する森田療法」と「地震被災者のトラウマケアと森田療法」の2つのシンポジウムについては、関西から参加された知人たちと後日意見を交した。「高齢者」では、壇上での学術的討論に対し、フロアからある高齢当事者の女性が、高齢なりに実生活を送っていると述べられ、その言葉に森田療法的重みを感じられた。高齢者、トラウマケアともに、医学化、心理学化し過ぎず、ネガティブ・ケイパビリティを発揮し、四苦八苦を生き抜くところに森田

療法の真骨頂があるように思った。

歴史のセッションでは、史料保存の公的な整備の必要性について、重要なご指摘があった。森田没後80年の今年、舞台は熊本から高知に移り、7月に墓前祭など記念行事が開催される。なお「森田療法と五高」については、藤瀬教授を中心に、関連発表を編纂して記念誌を出版する企画が進められている。

第6回日本ポジティブサイコロジー医学会学術集会

■2017.11.25

■東京/慶應義塾大学日吉キャンパス

(慶應義塾大学大学院医学研究科眼科学教室) 松隈信一郎

2017年11月25日に慶應義塾大学日吉キャンパス協生館藤原洋記念ホールにて第6回日本ポジティブサイコロジー医学会学術集会が開催された。本大会は慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科委員長・教授兼同大学ウェルビーイングリサーチセンター長の前野隆司氏が会長を務められた。本学会は「ポジティブネスという状態が心身、さらには人々の健康にどのような影響を与えるのか」という議論を通して、日本におけるポジティブサイコロジーの分野を医療面から牽引し、ポジティブネスのサイエンスを広めることを目的とする学術団体であるが、第6回目を迎える本大会では、初めて医師ではない研究者が会長を務められた。「分野を超えたポジティブサイコロジー医学の発展を」とのテーマのもと、各分野から錚々たる演者によって、ウェルビーイングを高めるためにはどうすればよいかという主題について幅広い議論が展開された。

精神医学から大野裕氏（一般社団法人認知行動療法研修開発センター理事長）と三村將氏（慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室教授）が「レジリエンス」という概念を用いて、ポジティブサイコロジーと認知行動療法を繋げる講演を行った。他にも、心理学からは日本のポジティブサイコロジーの草分け的存在である島井哲志氏（関西福祉科学大学心理学部心理科学科教授）、幸福学からは前野隆司氏（慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授）、公衆衛生学からは武林亨氏（慶